大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

和泉式部の和泉下向

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪公立大学　現代システム科学研究科　現代システム科学専攻　言語文化学分野 公開日: 2024-04-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 青木, 賜鶴子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/0002000669

和泉式部の和泉下向

青木　賜鶴子

和泉式部という女房名は、最初の夫の橘道貞が和泉守であったところからの呼び名とされるが、和泉式部自身は和泉には下っていない、というのが昨今の通説のようになっている(1)。はたしてどうなのか、諸資料を確認しつつ、今一度検証しておきたい。

一　和泉守道貞

和泉に下らなかったとされる根拠の一つは、たとえば家集に載る次の歌である。

和泉と云所へいきたる男の許より「佐野の浦といふところなむ、こゝにありけりと聞きたりや」と言ひたるに

いつ見てか告げずは知らんあづまぢと聞きこそわたれ佐野の舟橋　（続集三五〇）(2)

「和泉と云所へいきたる男」は、和泉守として赴任した夫橘道貞をさす。「佐野の浦」は、和泉の国の浦（現在の大阪府泉佐野市あたりの海岸）、「佐野の舟橋」は上野国（現在の群馬県）の歌枕で、「東路の佐野の舟橋かけてのみ思ひわたるを知る人のなさ」（後撰・恋二・源等）の歌によって有名であった。この歌をふまえて、佐野の舟橋で有名な「佐野」が、ここ和泉の国にもあることを知っていますか（あなたも早くいらっしゃい）と、都にいる和泉式部を誘ったのであろう。

和泉式部の歌は、初句に「いづみ」を隠しつつ、行って見たこともないのですから、教えて下さらなければ知るわけがないじゃない、というもの。夫婦仲はそれほど悪くない感じであるが、ともかくこの時、道貞はすでに和泉守として当地に下向しており、和泉式部はまだ都にいる。

次の歌も、和泉下向が疑われる根拠とされてきた。

また、和泉守道貞が妻のくだる日、わがくだるおなじ日なりければ

中々におのが船出のたびしもぞ昨日の淵を瀬ともしりぬる
（正集二五八）

この歌は別のところに、次のような形で入っている。

「もろともにゐ中へ」などいひし男、去りて、こと女をゐて行くときゝて

中々におのれふなづる日しもこそ昨日の淵をさとも知りぬれ
（正集七四〇）

七四〇は、一緒に地方へ下ろうと言っていた男が、離縁して別の女を連れて行くと聞いて詠んだ歌。二五八では、その男が道貞であり、その妻が下向する日と、和泉式部の船出する日が重なったという。和歌も小異があるが、「世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる」（古今・雑下・読人不知）をふまえ、よりによって自分が船出する日と同じなんて、昨日の淵が瀬になるという有為転変のたとえを実感したというのである。

正集二五八は、和泉の守道貞の妻が和泉の国に下った、とも読めるから、和泉式部が当初都にいた（続集三五〇）ことと合わせて、和泉式部が下向していない根拠とされたのだろう。

しかし、正集二五八詞書の言うところは、「和泉守道貞」の妻が下向した、ということであって、「和泉国に」下向した、ということではない。下向先は和泉とは限らないのである。この詞書については、後に改めて検討する。

道貞が和泉守であった時期は、『小右記』長保元年（九九九）九月二十二日条に「和泉守橘道貞[3]」と見え、この時和泉守であったことがわかるが、その期間はよくわからない。和泉式部との結婚の時期も諸説あるが、小式部内侍出生が長徳三年（九九七）とすると、長徳二年頃以前であろうか。

二　陸奥守道貞

さて、道貞は、寛弘元年（一〇〇四）に陸奥守となる。この年の三月、赴任にあたり道長邸に挨拶に立ち寄ったことが『御堂関白記』に見える。「陸奥守道貞（橘）申赴任由、賜盃酌、次有和奇（哥）事、賜直装束・野釵・胡録（籙）・弓・馬・鞍等[4]」（三月十八日条）とあり、道長は盃酌を下賜し、和歌を詠み、また宿直装束・野釵（のだち）・胡籙（やぐない）・弓・馬・鞍等を下賜した。

半年後の閏九月には、道貞の妻子が下向した。『御堂関白記』に「陸奥守道貞（橘）朝臣妾子下向、自装束幷女騎装束・馬・鞍等、以安隆（藤原）朝臣送遣、有和哥」（閏九月十六日条）とあり、道長は自分の装束幷びに女騎用の装束・馬・鞍等を、藤原安隆を使者とし、和歌を添えて贈っている。

この妻は和泉式部とは別人で、道貞の陸奥下向を聞いた和泉式

部は、

陸奥国の守にてたつを聞きて

もろ友にたゝまし物をみちのくの衣の関をよそにきく哉

（正集八三八）

と詠み、もうお別れしてしまったけれど、もし以前のままの仲だったら一緒に旅立ちたかったのに、と未練を見せている。また、

陸奥国へ言ひやる

高かりし波によそへてその国にありてふ山をいかに見るらむ

（続集八）

によれば、浮気をすれば波が越えるという陸奥の末の松山を、あなたはいったいどういう気持ちで見ているのかと、過去の道貞の浮気を責める歌を陸奥に送っている。寛弘元年の時点では二人の関係はすでに切れていて、道貞は別の妻を陸奥に伴ったのだが、その原因は道貞の浮気にもあったことがうかがえる。

なお、和泉式部は、この前年、長保五年（一〇〇三）十二月に帥の宮敦道親王の南院に迎えられた。そのため翌寛弘元年正月、正室の藤原済時女が父の邸に戻る騒動があったのだが、この和泉式部の噂は、夫大江匡衡に随って尾張に下向していた赤染衛門のところまで聞こえた。『赤染衛門集』一八一・一八二に、次のように見えている(5)。

和泉式部と道貞と仲たがひて、帥の宮に参ると聞きてやりし

うつろはでしばし信太の森を見よ帰りもぞする葛のうら風

返し、式部

秋風はすごく吹くとも葛の葉の恨み顔には見えじとぞ思ふ

心変わりしないで、しばらく信太の森（道貞）の様子を見ていなさい、葛の葉が裏返る（あなたの所に戻ってくる）かもしれないでしょう、と心配する赤染衛門に、あの人は私につらく当たるのですが、恨み顔には見られたくないと思います、と返事している。

『赤染衛門集』は、ほぼ年代順に歌が並んでいることが知られるが、次の一八三・一八四(6)も和泉式部との贈答である。

道貞みちのくにになりぬと聞きて、和泉式部にやりし

行く人もとまるもいかに思ふらん別れてのちのまたの別れは

かへし、式部

別れてもおなじ都にありしかばいとこのたびの心地やはせし

陸奥国に行く人も京にとどまるあなたも、夫婦の別れの後に再び別れることになって、どんな気持ちでおられることか、との気遣いに対して、夫婦として別れても、同じ都に住んでいたなら、このたびの旅立ちの悲しみほどではなかったでしょうに、というのである。

三　左京の命婦

次に続くのは、道貞が陸奥下向の途次、赤染衛門夫妻のいる尾張に立ち寄った折のものである。『赤染衛門集』一八五・一八六に、

道貞くだるとて、道なれば、尾張にきて物語などして、かくはるかにまかることの心細きことなどいひて帰りぬるに、さるべき物などやるとて

ここをただ行かたのとは思はなんこれよりみちのおく遠くとも

返し、道貞

いざさらば鳴海の浦に家居せんいとはるかなる末の松とも

と見え、さらに続けて、左京の命婦との贈答が載せられている（一八七～一九〇）。

一条院にさぶらひし左京の命婦、和泉の守の妻（め）にて下るがいひたる

都路の心もしるくしをりして君だにあると思ふ道かな

返し

しをるともたれか思ひし山道に君しも跡をたづねけるかな

又これより、「いかでみづから」などいひて

あはじてふ道にだにこそあふと聞けただにて過ぎむ人のつらさよ

かへし、命婦

山をだに思ひへだてぬ道なればこれよりすぎむ心ちやはする

左京の命婦は、『紫式部日記』に「かねてより、上の女房、宮にかけてさぶらふ五人」の一人として名が見える、内裏女房で彰子にも奉仕していた女性であろう。この女性は和泉の守の妻として下向するにあたり、尾張の赤染夫妻のもとに歌を届けてきた。三首目の「あはじてふ」の歌やその詞書に「いかでみづから（なんとか直接お会いしたい）」とあるので、直接訪ねたのではなく手紙を託してきたのであろう。

岡一男氏は、前掲『御堂関白記』に見える、陸奥守道貞の「妾」と、この左京の命婦を同一人物かとされ、その後もこの解釈で落ち着いていたようだが[7]、寛弘元年（一〇〇四）十一月九日に藤原脩政が和泉守と見えることから（御堂関白記）、左京の命婦の夫の「和泉守」を藤原脩政かとする説もある[8]。

いっぽう、『赤染衛門集全釈』[9]は、この「和泉守」を「前和泉守橘道貞か」とし、

【参考】この贈答と続く189 190は、和泉守の妻となって任国へ下る左京の命婦と交したものだが、都又は和泉国と尾張国とのやりとりと見るには、187「君だにあるとおもふ道かな」188

「君しも跡を尋ねけるかな」などの表現や内容がぴったりしない。これは前和泉守道貞と共に陸奥へ下る左京の命婦が、途次尾張に滞在して歌をよこしたと見るべきであろう。前妻和泉式部と赤染が親しい間柄なのを遠慮して、歌のみ道貞に託してよこしたものと思われる。しかしなぜ「道貞のめ」又は「陸奥守のめ」と詞書しなかったのかという疑問は残るのである。

と述べている。私も同意見だが、歌のみ託した人は道貞でなくてよい。『御堂関白記』によれば妻子は道貞に遅れて閏九月に下ったらしいから、道貞は同行していないのではないだろうか。

京または和泉から尾張に送ったものとして相応しくないのは、『赤染衛門集全釈』の通り、和歌の内容からも言えるが、そもそも京から和泉国に下るといって、尾張国にいる赤染衛門に和歌をことづけてくる、というのもよくわからない。陸奥に下向するのであれば、道貞がそうしたように、通り道である尾張に立ち寄るのは有り得ることである(10)。

これと同様に、和泉式部正集二五八詞書の「和泉守道貞」の場合も、「前和泉守道貞」の意で書いているのではないだろうか。男性貴族日記に記される呼称はもちろん正確であろうが、家集の詞書の場合はそれほど厳密ではなかった可能性も考えてよいだろう。すなわち正集二五八詞書は、「前和泉守道貞の妻が、夫の任国に下る日…」の意と考えられ、和泉国下向と限らなくてよいのである。

四　舟旅の歌群

ところで、和泉式部正集六六四から六七六は、和泉下向の折のものかと思われる歌群である。少し長いが、引用しておく。

長柄の橋を見て

ありけりと橋は見れどもかひぞなき舟ながらにてわたると思へば　（六六四）

水のほとりに、千鳥のたゞひとつ立てるを見て

友をなみ川瀬にのみぞ立ちゐける百千鳥とは誰かいひけん　（六六五）

葦おほく積みあげたる舟にいきあひて

葦わくる程にきにけり立つ浪の音に聞きてしこや難波潟　（六六六）

潮みちぬとて舟出だす所

おのれたゞ満ちくる潮もありけるを思ふ人こそ我はふなづる　（六六七）

車川にて

車川いふ名やなどて流れけんおそろしげにもみえぬ渡を
（六六八）

網曳かせて見るに、網曳く人どものいと苦しげなれば
阿弥陀仏といふにも魚はすくはれぬこやたすくとはたとひ成らん
（六六九）

風にさはりて舟とゞめたる所に、貝ひろひてもてきたるを見て
見る人もなぎさにをればかひなしと思はぬあまのしわざ成べし
（六七〇）

そこに風にさはりて、日ごろありけるに
網の目に風もとまらぬ浦にきてあまならなくにながゐつる哉
（六七一）

仮屋して浜づらにふしてきけは、都鳥なく
事とはゞありのまに〳〵宮こ鳥都の事を我にきかせよ
（六七二）

いも寝られぬまゝに探れば、衣の濡れたるもあはれなり
浅茅生にやどる露のみをきゐつゝ虫の寝られぬ草枕哉
（六七三）

桜井こゆる日
こえくればたゞぢなりけり桜井と名のみぞ高き所なりける
（六七四）

月おもしろきに、京を思ひやりて
見るらんと思ひおこせてふる郷のこよひの月をたれ詠らん
（六七五）

又
宮こにて詠し月を見る時はたびのこゝちともおぼえざりけり
（六七六）

「長柄の橋」に始まり、「難波潟」（六六六）、「長居」（六七一）などの摂津国の歌枕を通りつつ行く、舟旅である。六七一「網の目」は「依網」（現在の大阪市住吉区）に依るだろうか[11]。「網曳かせて見る」（六六九）こともあり、道中を楽しんでいるようだが、途中「風にさはりて、日ごろありける」（六七一）と、大風のため足止めされ、おさまるのをしばらく待つこともあった。

六六八の「車川」は所在不明だが、恐ろしそうにも見えない渡し場なのに、どうしてこんな名がついたのかと詠んでいるから、和泉式部にとっては聞いたこともない地名で、おそらく車の回転のように水が渦を巻くほど流れの早い川を想像していたのに、そうでもなかったというのであろう。

六七四の「桜井」は、後世『太平記』で著名となる西国街道の宿駅、桜井（現在の大阪府三島郡島本町付近）であろうか。『明

月記』承元二年（一二〇八）十月十五日条にも見える。歌では、「桜井」とは名ばかり高くて、実際に越えてみたらそうでもないというのだから、歌枕としては無名ながら、交通の要所として知られていたのであろう。

桜井が北摂の島本町付近であるなら、長居（現在の大阪市東住吉区）から北に進むことになるが、いったん和泉に下向し、しばらくして京に戻ったのであれば、これは帰路に詠まれたのかもしれない。そうすると続く六七五・六七六の二首、この歌群の最後の二首で都恋しさが詠まれているのは必然ともいえる。

五　旅の内実

さて、この歌群の旅は、諸注、和泉式部と道貞が一緒に下ったと考えているようだが、道貞は先に和泉に下向していて、和泉式部は後から下ったのではないだろうか。陸奥守道貞に遅れて妻子が下ったように、妻があとから下ることは有り得るだろう。そう考えると、この歌群の解釈も変わってくると思われる。

たとえば六六七の第四句「思ふ人こそ」は「思ふ人とぞ」の誤写説もあるが、「こそ」を呼びかけの間投助詞と考えれば(12)、下句は、「いとしい人よ、私は船出します」の意となり、和泉国府で待っている夫に向けたもの、ということになる。まだ新婚といえる妻が、夫の待つ和泉国にいよいよ出発となった時の高揚した気持ちを詠んでいるのである。

また、六七〇は、見る人もいない渚に一人いるのは甲斐がないと思っているのに、そうとは思わぬ海人が、私を喜ばせようと貝を持ってきてくれたよ、というもので、「見る人」とは、今はそばにいない夫、和泉国で待つ夫をさすと考えられる。

この旅について、和泉国なら依網の浦から牛車で一日の旅路であるからわざわざ舟で行って風を待つ必要はない、との見方もある(13)。たしかに『伊勢物語』の男は、和泉の国へ行く途中、住吉の浜を通って「いとおもしろければ、おりゐつつゆく（第六八段）」というから、友人と陸路を馬で旅したのであるが、牛車で通行可能な街道が整っていたかは不明で、女性には難しいのではないか。

ちなみに『更級日記』の作者は、水路和泉に往復している。淀（現在の京都市伏見区淀町付近）から船で淀川を下り、淀川西岸の高浜（現在の大阪府三島郡島本町）に泊った夜、船で遊女が来るのを見たり、次の日は住吉の浦を過ぎながら、松や海の有様、浪の寄せる渚の景色など、この浦の何度も振り返らずにはいられないほどの素晴らしさはいくら見ても見飽きないほどだと書いている。

上京する時は、大津（現在の泉大津市あたり）から舟に乗ったが、その夜の雨風の激しさに、一度は舟を引き上げて夜を明かしたり、風のために舟が出せず五、六日すごしたりと、この歌群の和泉式部の旅と似通うところがある。

和泉式部は摂津に滞在したことがあり、最後の夫藤原保昌は摂津守に任ぜられたこと等から、この歌群を摂津に旅した時のものかと見る説(14)もある。たしかに正集・七三九に、

津の国といふ所に薄を植ゑおきて、京に来たるに、かの国より「生ひにたり」といひたる、返りごとに

植ゑおきし我やは見べき花薄葦のほにだにいださずも哉

とあるのは、夫保昌が摂津守在任中、和泉式部も一時下向したことを示していよう。

摂津国府の所在地は明らかではないが、『国史大辞典』(15)「国府」の項の国府所在一覧にあげられる、推定される所在地は、大阪市天王寺区国分町・生野区生野西・東区法円坂町・中央区森ノ宮中央等であり、いずれにしても現在の大阪市内のようである。

しかしながら、この歌群の旅は、摂津国府の推定地よりさらに南、住吉から長居を通り、風が収まるのを何日も待つような舟旅であり、摂津国では不自然ではないだろうか。たしかに場所のわかる地名は摂津しか出てこないが、摂津を通って和泉に下っていないとも言えないのである。

この歌群をじっくり読み込めば、ひとり夫の任地をめざして下向する女の姿がほの見えてくる。やはり和泉下向を詠んだ歌群と考えるのが最もふさわしいと思われる。

和泉式部が活躍した年代に近い『後拾遺集』（羇旅・五〇九）が、この歌群の六七二「事とはゞ」の歌を、「和泉に下りはべりけるに、夜、都鳥のほのかに鳴きければよみ侍ける」と詞書して採録していることも、傍証の一つと言えるだろう。

繰り返しになるが、道貞は先に和泉に赴任していて、和泉式部が後から追いかけたと考えられる。冒頭で引用した、道貞だけが和泉国にいる状況（続集三五〇）は、こういう事情だったのである。

六　おわりに

以上、国司が赴任するにあたって、つねに妻が同行するとは限らないこと、「和泉の守」の呼称は、前任者を指している可能性があること、和泉下向の折に詠んだとおぼしい歌群が存在すること、等により、和泉式部が和泉の国に下っていない決定的な証拠はないことを述べた。結局、旧説に近い結論となったが、旧説に対して出された疑問については、おおかた解消できたのではない

かと思う。

和泉式部という女房名は、和泉守橘道貞の妻として認知されていたためであることは言うまでもないが、「和泉守の妻」として印象深い何かがあったのではないか。そのひとつとして、和泉式部の和泉下向があり、その折に詠んだというこの歌群が流布した、といった事情が、「和泉式部」の呼称の定着をいっそう促したのではないか、とも想像されるのである。

注

（1）増田繁夫『冥き途　評伝和泉式部』（世界思想社、一九八七年）、後藤祥子「和泉式部は和泉へ行ったか」（『和歌文学の伝統』有吉保編、角川書店、一九九七年）、武田早苗「「佐野の舟橋」詠」『平安中期和歌文学攷』武蔵野書院、二〇一九年。初出（二〇〇五年）、等。

（2）和泉式部集の引用は、榊原本「和泉式部集」「和泉式部続集」により、慣例に従って「正集」「続集」と称する。引用にあたっては、仮名遣い・清濁を整え、適宜漢字仮名の表記をあらためた。なお底本の誤りと考えられるなど本文を校訂した場合は、もとの本文をルビの形で示した。

（3）『小右記』の引用は『大日本古記録　小右記　二』（東京大学史料編纂所編、岩波書店、一九六一年）による。

（4）『御堂関白記』の引用は『大日本古記録　御堂関白記　上』（東京大学史料編纂所編、岩波書店、一九五二年）により、講談社学術文庫『御堂関白記　上』（倉本一宏訳、講談社、二〇〇九年）を参照した。

（5）『赤染衛門集』の引用は『新編国歌大観』により、適宜漢字をあてた。この贈答は、和泉式部正集（三六四～三六五）に「道貞去りて後、帥の宮に参りぬと聞きて、赤染衛門」、『新古今集』（雑下・一八二〇～一八二一）に「和泉式部、道貞に忘られて後、ほどなく、敦道親王かよふとききてつかはしける」の詞書を伴って収められている。

（6）この贈答は、正集では、「赤染がもとより」（一八二）、「去りたる男の、遠き国へゆくを、いかが聞くといふ人に」（一八三）と、贈答の形をとらず、また二首目は固有名を伏せた形で載せられている。

（7）岡一男『源氏物語の基礎的研究―紫式部の生涯と作品』（東京堂出版、一九六六年。初版東京堂、一九五四年）。大橋清秀「和泉式部の結婚」（『和泉式部伝の研究』和泉書院、一九九四年。初出一九五六年）、山中裕『和泉式部』（人物叢書、吉川弘文館、一九八四年）等。講談社学術文庫『御堂関白記』も「妾」に「左京命婦」と注している。

（8）和歌文学大系20『賀茂保憲女集・赤染衛門集・清少納言集・紫式部集・藤三位集』（赤染衛門集は武田早苗氏担当、明治書院、二〇〇〇年）、新編日本古典文学全集『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』（紫式部日記は中野幸一氏担当、小学館、一九九四年）、笹川博司校注『紫式部日記』（和泉書院、和泉古典叢書12、二〇二一年）等。

（9）関根慶子・阿部俊子・林マリヤ・北村杏子・田中恭子『赤染衛門集全釈』（風間書房、一九八六年）。

（10）このほか、『赤染衛門集』の前の部分では「道貞」と呼んでいる

のに、ここだけ「和泉守」と呼ぶのは不自然、という指摘もある。しかし、内容的には、左京の命婦が陸奥に下る途中で尾張に立ち寄ったと考えるのが最も自然であり、この呼称は他とは位相が違うと考えるしかないように思う。

(11) 前掲、増田繁夫『冥き途　評伝和泉式部』。

(12) 佐伯梅友・村上治・小松登美『和泉式部集全釈』（新装版笠間書院、二〇一二年。初出東宝書房、一九五九年）は呼びかけとする解釈を示しつつ「自分は最愛の人と共に舟出すると、相対させた言ひ方」としている。

(13) 前掲、増田繁夫『冥き途　評伝和泉式部』。

(14) 前掲、後藤祥子「和泉式部は和泉へ行ったか」。

(15)『国史大辞典　5』（吉川弘文館、一九八五年）「国府」の項「国府所在一覧」。

（あおき　しづこ・本学教授）